Exophiala dermatitidis による縦隔炎の一症例

◎佐藤 愛理[1)]、須田 那津美[1)]、武藤 結衣[1)]、小原 登志子[1)]
地方独立行政法人 宮城県立こども病院 検査部[1)]

【背景】黒色真菌の一種である *Exophiala dermatitidis* の感染は、主に基礎疾患を有する易感染者において問題となり、全身性に播種を来たした場合には予後不良である。報告の多くは成人例であるが、小児例も散見される。今回、小児における *E. dermatitidis* による縦隔炎を経験したので報告する。【症例】0 歳男児、無脾症候群、複雑心奇形を有し、日齢 4 に肺静脈還流異常症に対する手術が施行された。術後 67 日目、開胸管理中に縦隔表面浸出液の色調の悪化があり、浸出液の培養検査が提出された。グラム染色では酵母真菌様の菌体が確認され、*Candida* 属を想定したが、培養 3 日目に黒色のコロニーが発育し、matrix assisted laser desorption/ionization time of flight mass spectrometry(MALDI-TOF-MS)にて本菌が同定された。また、スライドカルチャーでは *E. dermatitidis* の特徴であるアネロ型分生子が観察された。その後、心臓表面にも黒色顆粒様の滲出物がみられるようになり、同菌が検出された。薬剤感受性検査を外部機関に依頼し、リポソーマルアムホテリシン B による治療が開始されたが、改善は得られず、術後 102 日目に死亡した。なお、経過中、気道吸引物からも真菌塊が検出されており、同菌と同定された。血液培養は複数回提出され、通常よりも培養時間を延長して実施したが、いずれも陰性であった。【考察】黒色真菌の生化学的特徴は、メラニン合成能以外に特記すべきものはなく、同定は分生子の配列や菌糸構造などの形態学的性状に基づいて行われることが多いが、スライドカルチャーは発育に時間を要する。今回 MALDI-TOF-MS が迅速な同定に有用であった。小児の *Exophiala* 属感染症は稀であり、起因菌として想定されにくいが、リスクを有する小児患者においては侵襲感染を起こす可能性があり、治療の対象となりうる。その一方で、治療薬が確立されていないのが現状であり、速やかな同定、感受性検査、治療が必要である。コロニーの形態から本菌が疑われた時点で、担当医師や専門機関などと密に連携を取り、迅速に検査を進められる体制を整えることが重要である。

連絡先 - 宮城県立こども病院 022(391)5111